

スペンサー「総合哲学の体系」の形而上学的構想

Metaphysical Conception of Spencer's *System of Synthetic Philosophy*

森 秀 樹*

MORI Hideki

The purpose of this paper is to clarify what Spencer aimed to achieve by systematizing the concept of “evolution” as a principle. He argued that living organisms discover ways of adapting to their environment through trial and error, and eventually form corresponding relationships between themselves and their environment. In the process of adaptation, organisms will develop ways of recognizing and acting on their environment. Society functions as an environment that defines how individual human beings live, but at the same time, society evolves ways of being that drive evolution by forming a culture that promotes evolution. Ethics plays the same role by working on the inside of the individuals that make up society. Spencer's *System of Synthetic Philosophy* sought to reveal the process by which the differentiation of elements in the environment expanded the realm of “the knowable”, and with it the gradual opening up of the structure of the world behind it. And in doing so, it can be interpreted as an attempt to play a role in confirming truth and securing further metaphysical meaning in the modern era, when the foundations of truth have been shaken while the natural sciences have developed. Spencer has been understood as a writer who advocated social evolution and libertarianism, but such interpretations only partially capture his system, and it can be said that the heart of his philosophy lies in its systematicity.

キーワード：スペンサー、「総合哲学の体系」、進化、環境、形而上学

Key words：Spencer, *System of Synthetic Philosophy*, evolution, environment, metaphysics

序章

スペンサーはダーウィンと並んで進化論を唱え¹、彼の哲学は19世紀後半には英語圏を中心に広く受容された。また、「社会進化 (social evolution)」の概念は、国家による個人への介入を望ましくないとする自由主義を主張するものとして受け入れられ、サムナー、ウォードといった草創期のアメリカの社会学者やデュルケーム『社会分業論』に影響を及ぼした²。しかし、彼の進化論は生物学的な裏付けが不十分であるため、生物学に取り入れられることはなかった。ダーウィンの進化論が遺伝の仕組みの解明後も生き残ったのとは対照的である。社会進化論も実証性を欠いたイデオロギーと見なされるようになり、哲学の領域においても、急速に忘却されていった。これまでスペンサーは社会学の祖ないしは社会進化論の主張者として理解されてきたが、彼が一生を費やしたのは『総合哲学の体系 (System of Synthetic Philosophy)』(1860-1896)の執筆であった³。この著作は、有機体が環境との相互関係の中で分化・再統合するという進化のあり方を普遍的な原理と見なし、その原理によって物理学、生物学、心理学、社会学、倫理学といった広範な領域における発展を説明しようとしている。しかし、このような演繹は個別の領域においては問題を引き起こし、スペ

ンサーが批判される原因ともなっている。

そこで、本論文は、スペンサーが、進化概念を原理とする体系化によって、全体として何を目指したのかを明らかにすることを試みる。まず、『第一原理』を通して、スペンサーが体系的な記述を行うにあたって進化という概念を原理とした理由を考察し、『総合哲学の体系』が形而上学的な目的をもっていることを明らかにする(第一章)。次に、『生物学原理』に依拠しながら、進化とは、生物が環境との相互作用の中で互いに絡み合う関係を形成することを意味することを確認する(第二章)。そして、『心理学原理』に基づいて、認識が環境との絡み合いを認知する役割を担っていることを確かめる(第三章)。そのような認識能力を備えた存在が集まるとき、社会や倫理といった新しい秩序が生まれるが、それらは進化を促進する役割を果たすということを明らかにする(第四章・第五章)。そして、これらの議論に基づいて、『総合哲学の体系』全体の形而上学的構想について考察する(終章)。

第一章 諸創発の体系的認識としての『総合哲学』

第一章の目的は、『総合哲学の体系』が形而上学的な役割を担っていることを明らかにすることである。まず、

* 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 教授

令和3年4月23日受理

『第一原理』の第一部に依拠して、『総合哲学の体系』を執筆した動機について確認する(第一節)。そして、スペンサーが「進化」の一般的なあり方を示しつつ、それを諸領域に適用していることを確かめる(第二節)。スペンサーは諸領域における進化を確認していくことで、「知りえないもの」へと接近しようとしている(第三節)。

第一節 『総合哲学の体系』の形而上学的目的

スペンサーは1860年に「総合哲学の綱領」(Spencer1860b)を公表し、その後、それに従って『総合哲学の体系』の諸巻を執筆していった。その冒頭に置かれているのが、『第一原理』である。この著作は第1部「知りえないもの」と第2部「知りえるものの法則」からなる。第1部は宗教と科学の関係について、第2部は実在の基盤となるものの生成(進化)について述べている。

19世紀になると、近代的自然科学が発達し、真理を保証する役割を担うようになってくる。すると、これまでその役割を果たしてきた宗教との間に対立関係が生まれ、宗教の意義が疑われるようになる(Spencer1862:11)。だが、スペンサーは科学と科学の役割を異なるものとした。科学は自然のあり方について多くのことを明らかにしたが、だからといって、人生に関わる全ての真理を解き明かすことができるわけではない。原理的に科学の外にとどまるものもある。そのような領域についてはこれまでで宗教が取り扱ってきたが(Spencer1862: 17)、彼は知りうるもの(the Knowable)からなる現象界(Phenomenon)と知りえないもの(the Unknowable)からなる叡智界(Noumenon)とを区別し、前者における真理を取り扱うのが科学であるのに対して、後者における真理を取り扱うのが宗教であるとした(Spencer1862: 90)。

ただし、近代の分析的な考え方は科学それ自身へも向けられる。ヒュームは科学の基盤となる因果関係が習慣でしかないのではないかという懐疑をつきつけた。このような経験論の伝統の中で、ミルは、科学を経験的なものとみなし、真理は暫定的なものにすぎないと考えた。これに対して、スペンサーの『心理学原理』は、論証の系列を遡っていけば、どこかで不可疑的なものに行き着かざるをえず、そのようなものは真とみなして良いという仮定を要請していた(Spencer1872: 392, 452)。確かに、スペンサーもまた経験論の立場に立ち、人間の認識には限界があることを認める。スペンサーはマンセルにならって二元論を受けいれている(Spencer1862: 65)。しかし、だからといって、経験によって確認されるものまで疑うのは合理的ではないと考えた。このような仕方、スペンサーは科学を基礎づけることができると考えている。

そして、スペンサーは、諸科学の個別的な知識を収集していく中で、学問の基盤には、個別的な経験には還元

できず、むしろ、アプリアリとみなすべき原理があることを見いだす。スペンサーは、「超越論的生理学」において生理学の領域においてみられる様々な構造が、分化という共通の法則によって発生してきたものであることを示そうとしている。個別的に見られる特徴は実は普遍的な現象として考えることができるというのである(Spencer1857b:70)。ここで「超越論的生理学」とは、個別的な構造について論じる生理学ではなく、これらの構造に共通する法則について論じるものである。科学は「知りえるもの」やその法則について解明する中で、直接は「知りえないもの」についてもまた触れていることになる。

個別科学は各々の領域における発見を蓄積してきたが、その体系化は途上にある。スペンサーは哲学を諸科学の知見を総合するものであるとしている。「科学は部分的に統合された知識であり、哲学は完全に統合された知識である」(Spencer1862:135f)。そして、哲学は、科学の営為を総合することによって、これまで宗教的なものが果たしていた役割を担うことになる。スペンサーはこのことを「理想的に完全な哲学は、非知覚的なものから知覚的なものへ、そしてまた、知覚的なものから非知覚的なものへと諸存在者を經由して生じる一連の変化の全体を、別々に、そしてまた全体として定式化するのではなくてはならない」(Spencer1867a: 541)と表現している。このようにして、スペンサーは、宗教的真理の場を新たな仕方でも確保するために、科学を基礎づけるとともに、それを哲学によって総合しようとする。『総合哲学の体系』はこのような形而上学的な役割を担っているのである。

第二節 「進化」概念の受容と普遍化

スペンサーが現象界における生成の原理と考えるのが「進化」である。ただし、以下において見ていくように、スペンサーはこの語を、生物の種が新たな種を生み出すという狭義の意味においてではなく、組織の組成が変化し、発展すること(develop)という広い意味で用いている。

カーペンターの『一般及び比較生理学原理』はフォン・ペーア思想をイギリスで広める役割を果たした。この本は「異質なものは特殊な構造は、より均質なものは一般的な構造から生じる。そして、それは漸進的な変化によってなされる」というフォン・ペーアの考えを紹介しており、この本からスペンサーはフォン・ペーアについて学んでいる⁴。スペンサーはすでに『社会静学』(Spencer1851)において社会が均質なあり方から分化したあり方へと進化することを論じていたが、同じ発想が生物の世界のみならず、様々な領域にも当てはまることを学んだのである(Spencer1904a: 384f.,406)。

スペンサーは「進歩：その法則と原因」において「進化」があらゆる領域に見られることを指摘している (Spencer1857a)。まず、彼は、フォン・ベアにならって、「有機的な進歩は同質的なものから異質的なものへの変化のうちにある」と定式化する。例えば、星雲の場合、構成物質が同質的であっても、場所は同一ではない。そのような差異によって分化が始まる。やがて、最初の分化によって、帰結の差異が生じ、それがさらなる分化を推進することになるという (Spencer1857a: 10)。そして、スペンサーはこの論文において進歩があらゆる領域 (地球、生命、社会、政府、産業、商業、言語、文化、科学、芸術) に見られると指摘している (Spencer1857a: 10)。スペンサーは、ラマルクやフォン・ベアからの影響を受けながらも、進化を普遍的な現象として考えており、生物の進化のみに限定していない。

『第一仮説』の第二部は (物質、天体、地球、有機体、心理的なもの、社会といった) 諸領域にみられる分化を様々な観点から分類しており、諸事例において「進化」の一般化を試みている。

さしあたり、スペンサーは進化について「物質の集中と、これに随伴する、運動の分散である。その際、物質は、非限定的で非凝集的な同質性から、限定的で凝集的な異質性へと変化する」と説明している (Spencer1862: 407)。その上で、スペンサーは単純進化 (simple evolution) と複合進化 (compound evolution) とを区別する。さしあたり、運動が分散し、物質が集中することによって、非凝集から凝集への変化が生じる。これが単純進化である。しかし、この非凝集から凝集への変化にとまって、二次的に、単形態 (uniformity) から多形態 (multiform) への変化が生じるとき、この進化は (単純進化から区別されて) 複合進化と呼ばれることになる (Spencer1862: 300, 329, 360)。そして、全体が部分によって構成されるようになる後者こそが本来の進化であるとされる (Spencer1862: 379f.)。

そして、複合進化には、1) 非凝集から凝集へ、2) 非限定から限定へ、3) 同質から異質へという三つの変化が成立していることが指摘される。これら三つの変化は相互に関係しあっている。まず、凝集は、分散していたものが集中することであり、非限定的な空間の中に限定された特定のものが出現することである。また、ある特定のものの集中が進むと平行して、他のものの集中も進むことがありうる。その場合には、ある特定のものと他の特定のものととの分化が進むことになり、あらゆるものが混合されていた同質な状態から、様々なものが分化した異質な状態が発生することになる。スペンサーはこの著作の第一の結論として「特定の同質な集積は、その部分が偶然的な力に不均等にさらされるため、同質性を失うことは避けられない」 (Spencer1862: 560) こと

を挙げている。そして、このような分化が一旦始めると、それはさらなる分化を誘発することになる。スペンサーは第二の結論として「分化した部分は……さらなる分化を引き起こす」 (Spencer1862: 361) を挙げている。このような動きは平衡 (equilibrium) を達成するまで進行する。ただし、この平衡は、静止状態ではなく、内的な運動が相互に釣り合っている動的均衡状態 (moving equilibrium) である (Spencer1862:499)。だが、このような組織化を進めてきた運動も摩擦などによりやがては衰えることがある。すると、均衡状態が崩壊し、再び分解 (dissolution) 状態 (分解、分散、死) を迎えることになる。これが第三の結論である (Spencer1862: 561)。このような変化の全過程は、物質と運動の集中 (concentration) と分散 (diffusion) として、したがって、進化 (evolution) と解体 (dissolution) として記述することができる (Spencer1862: 555)。

スペンサーは、非凝集から凝集へ至る「進化」のイメージを提示するにあたって、いくつかの範例を用いている。一つが天体の生成であり、もう一つが生物の発生である。前者においては、空間、時間、物質、運動、力といった観念をもちいて、天体の生成が物理学的な仕方でも語られる。このようなイメージは後にアレクサンダーらに受け継がれることになる (Spencer1867a: Part II Chap.3)。物質の運動が大きい場合、様々な物質は入り交じることになり、その意味では均質な状態にある。しかし、物質が引力によって集まり始めると、その均衡状態が崩れて、徐々に物質は集中し始め、物体が生じることになる。ただし、スペンサーによれば、集中にもかかわらず、内部に運動が保存される場合があり、内部に保存された運動が多いほど、その物体は二次的な変化を許容するという (Spencer1862: 288)。さらに、スペンサーは地球の生成においては「化学的分化」もまた起こるとしている (Spencer1862: 367)。以上において見てきたように、物質の世界における進化とは組み合わせの変化によって新しい現象が「創発」することである。スペンサーによれば、力そのものは存続しながらも、関係を変えることで、形態を変化させる (Spencer1862: 263, 378)。新しい現象の「創発」に見えるものは力の配列の変更によるものであることを帰納的に示そうとしているのである。

もう一つのイメージをなすのが発生の概念である。スペンサーは、フォン・ベアの発生学にならって、複合的進化について考えている (Spencer1864b: 137)。フォン・ベアは、有機体は均質な状態から相互作用の中で複雑な状態へと変化していくと考えた (Spencer1864a: 365)。「動物の卵の主要部分は最初はお互いに均質に分散しているが、やがて、卵は〔異質化という〕同様な仕方でも化学的に変化する」 (Spencer1867a: 334f.)。これらのことにもとづいて、スペンサーは、一方において、集

中が起りつつも、他方において、(結晶のように) 固定化してしまうのではなく、(膠質のように) 秩序だった変化が可能になることがあることを指摘し(複合的進化)、有機体の成立を説明しようとしている。

以上において見てきたように、スペンサーは、フォン・ベアから学んだ「進化」概念を一般的な仕方で表現しなおし、物理学と生物学の領域に適用している。

第三節 「進化」という普遍的原理の正当化

この節では「進化」の法則がスペンサーの総合哲学全体の中でどのような役割を果たしているかを考察する。まず、これは経験に基づく法則である。しかも、この法則は様々な領域において見いだすことができる(Spencer1857a: 10)。すると、この法則は帰納的によって正当化されると考えることができる(Spencer1862: 307)。しかし、「超越論的生理学」におけるように、進化の概念は個別的な進化の背後にあるアプリアリな構造を示しているとも考えることもできる。スペンサーは、「進化」を帰納による一般化というよりも、むしろ、「原理」であると考えている⁵。確かに、スペンサーは経験主義者であり、最初から原理を措定するわけではない。しかし、個別の分野における一般化からえられた考え方は自然選択にさらされ吟味されるとともに、ハミルトンのような「観念」としての妥当性を有し始める。そして、それが様々な領域において適用され、様々な成果を上げる中で、より確からしく思われるようになっていく。もちろん、進化のアプリアリ性を原理的な仕方で説明することはできない。だが、この主張は、様々な領域に広く見られる構造であるため、発想法のようなものとして役立つ。この見方によって、様々な実例を発見することができる(例えば、微分方程式が様々な領域での変化を記述することができるのと同様である)。そして、必要に応じて、この主張をより詳細に科学的に吟味していくことができる。

経験論の立場に立つ限り、認識は、実在そのものに到達することはできない。その意味で、二元性を否定することは出来ない。しかし、認識が物質界を受け入れるものであり、かつ、認識の基盤が物質にあるのだとすれば、意識の構造は最終的には物質界の中に場所を占めねばならない。意識と物質界の対立は両者が調和するに至るまで続くことになる。このように、一方において、進化は認識の拡張にほかならない。しかし、他方において、この認識の拡張そのものが進化であり、その背後には認識の誕生やそれを可能にした生物の誕生、さらには、諸事物の生成変化が隠されている。だとすると、諸領域における進化のあり方を記述する『総合哲学の体系』は、諸事物が生成するとともに、科学や哲学によってそれらに

対する認識が形成されていく全過程を記述しようとするものであるということになる(Spencer1857a: 10)。このような事情のもと、スペンサーはこの著作において物質、生物、心、社会、道徳の諸領域をすべてを、進化という観点から統合的に記述している(Spencer1867a: 542)。このことは『第一原理』の第一部と結びつけて理解されねばならない。すなわち、『総合哲学の体系』は進化という概念を用いて科学における「知りえるもの」を具体的に総合していくが、この営みは、科学の背後にあって直接は「知りえないもの」に接近するという形而上学的役割を果たすことなのである。

ただし、進化を認識できるということそのもの、すなわち、認識の進化、そして、その前提となる生命の進化の解明は、続く『生物学原理』と『心理学原理』に委ねられている。

第二章 創発と環境との相関的生成変化

第二章においては、生物における進化が『総合哲学の体系』にどのような寄与をなしているのかを明らかにする。まず、進化の一般理論の、生物学への適用とともに(第一節)、生物学における進化の独自性について概観する(第二節)。スペンサーにおける遺伝の問題について触れた上で(第三節)、進化とは、生物が環境との相互作用の中で互いに絡み合う関係を形成していくことであるというテーゼの意義について論じる(第四節)。

第一節 生命現象の進化論的解釈

スペンサーは『第一原理』に引き続き、『生物学原理』を公刊し、以上のような進化の理論を生物の諸現象に当てはめることを試みている。スペンサーは、『第一原理』において進化は一般的には物質と運動の再配置として規定しようとしていたが、同じことが生物の進化にも当てはまるとしていた(Spencer1864a: 464)。そして、『生物学原理』においても、「この著作の目的は、進化の法則によって説明したり、解釈したりできる生物学の一般的諸真理を前進させることである」と述べている。実際、『生物学原理』は成長、構造、機能、修復、適応、個性、生殖、遺伝、変異といった現象を取り扱うが(Spencer1864a: § 37)、それらを進化という概念によって統一的に説明しようとしている。すると、『生物学原理』は、環境に対する生物の適応を、物質の世界に見られる「発展」と連続した「進化」のプロセスとして総合することを試みているということになる。このような目的のもと、スペンサーは「生物学の帰納」において生物学的な諸現象について「進化」ないし「発展」という観点から再解釈を行っている。

生物は、消滅しないためには、成長を続けなくてはな

らない。一方において、成長が生存に有利に働く場合がある。例えば、一定のサイズは環境のゆらぎに抵抗できるであろうし、生存競争でも有利であろう。だが、他方において、成長の継続は生存を難しくする。例えば、生物のサイズは三乗で増えるが、栄養吸収は二乗でしか増えることができない (Spencer1864a: § 46)。また、環境によって、生存できる生物の総量は決まっているであろう (Spencer1864a: § 47)。すると、構造的な変化によって成長のジレンマを克服しなくてはならなくなる。生命の進化とは(試行錯誤の中で)このような諸パラメーターの間で可能な解を求めることなのである。従って、進化については物理学の意味で将来を予言するような法則を前もって発見することはできない⁶。

同様の進化は生物の内部でも進行する。単細胞生物が増殖していくと、中心と周辺の違いが生じる。中心にあるのか、周辺にあるのかによって、各々の細胞の環境が異なることになり、機能の点で分化していくことになる。機能の差異は構造の差異をうみだすことになる。そして、そのような外壁の形成によって、生物は外的環境から独立した内的環境をもつことができるようになり、個体としての自律性を備えるようになる (Spencer1864a: 149)。

ただし、機能や構造が分化するだけでは、生物は存続できない。分化していったもの同士が調和がとれるように統合される必要がある (Spencer1864a: 161)。すると、部分相互の連携を行い、機能を維持するための部分が必要となる。例えば、活動はエネルギーを消費し、やがては機能低下を招くため、消費されたエネルギーを補充する必要がある。未分化な状態であれば、それも各部分が行わねばならないが、それでは分化した部分の機能が発揮されないことになってしまう。そこで、エネルギーを運搬する部分が生じてくることになる。また、各部分の活動を調整する神経系のような仕組みも必要となる。さらに、部分は常に損傷の危険性にさらされているため、それを補修する機能が必要となる。特に、構造が分化すると、部分の損傷の補修が難しくなるため、より複雑な再生の仕組みが求められることになる (Spencer1864a: § 62)。ただし、このような統合は部分間を調整する仕組みを複雑化するだけでは困難である。生物全体の中での調整や環境の中での調整 (= 適応 (adaptation)) が必要となる。例えば、全体の大きさが制約されていれば、ある部分の肥大化は他の部分の縮小を必要とする (Spencer1864a: 196)。生物が新たな機能分化を生み出したとしても、それが状況の中で持続できなければ、やがて、失われてしまう。進化は環境全体の中に位置づけられる必要があるということになる (Spencer1864a: 197)。このように考えるとき、生物にとって個体とは何かという問いは単純ではないことが分かる (Spencer1864a: §

72)。群体は複数の個体の集合であるとともに一つの共同体である。確かに、多細胞生物の細胞を個体とは呼ばないが、部分となる細胞にも自律性が見られる。また、生殖するペアを個体とは呼ばないが、それは生殖を目的とする最小のユニットである。それどころか、生命を環境への適応と考えるならば、生命は物理的な境界線をこえて環境とゆるやかにつながっているのではなくてはならない。生命を構成する諸ユニットがそれぞれの文脈の中で個体として機能するのである (Spencer1864a: 208)。そして、様々なレベルにおける個体の相互関係が全体としての環境をなすということになる。

第二節 生命に固有な進化のあり方

このように生物における進化を一般的な仕方を取り扱おうとすることによって、かえって、生物において現れる進化の新しい側面が焦点化されることになる。それを踏まえて、スペンサーは生命を「外界との関係に内面での関係が適応し続けること (the continuous adjustment of internal relations to external relations)」と定義する (Spencer1862: 84, Spencer1864a: 80)。生命とは外界に適応することができるように内面での関係を構成することであるというのである。

この定義から、進化について生物に特有の観点を四つ引き出すことができる。まず、第一に、環境と生物とが外と内として理解されている。すなわち、一方において、境界線をはさんで環境と生物が接し合い、一つのシステムを形成しているが、他方において、生物の側は一定の自律性を備えており、外界に呼応するものとなっている。

第二に、適応にも程度の違いがあると考えられている。生物がある環境下で生存することができれば、その環境に適応していると見なすことができるが、そこにもより高次な適応とそうではない適応とを区別することができる。このような適応には個体差がありえ、適応の違いは長い時間の中では生存の違いをもたらしと考えられる。このことから、「適者生存 (the survival of the fittest)」 (Spencer1864a: 444) という考え方が生じることになる。環境の変化に対して、よりよく対応できるほど、生命は高次なものであるということになるが、それは長い時間の中で初めて言えることである (Spencer1864a: 82)。

第三に、適応は時間的なプロセスとして理解されている。種の水準で考えれば、適応のあり方を改善するといったことが見られる。すなわち、無生物の場合、環境からの影響に対する反応は決まった帰結しかもたらさないのに対して、生物の場合、環境からの影響は生物のあり方に変化を及ぼし、同じ環境からの影響であっても、(より効率的な) 異なった反応を引き起こすようになる (Spencer1864a: 78)。このように生物はさらによりよい対応を行うよう変化していく。環境の変化は生命の変化

の引き金となり (Spencer1864a: 74)、環境の変化に直面した生物はそれぞれの仕方新しい均衡状態を達成しなくてはならなくなる (Spencer1864a: 432)。そのために、生命は、新しい機能を身につけたり、自らの構造を変化させることによって新しい環境に適応しようとする(「直接的均衡化 (direct equilibration)」) (Spencer1864a: 442)。ということは、より複雑な環境に適応できる生物はより複雑になっていく (Spencer1864a: 87)。例えば、人間の場合、環境に適応するために、身体の水準のみならず、心理の水準や社会の水準においても構造を発達させた。さらに、スペンサーは、ラマルクにならって、ある個体が身につけた新しい機能は何らかの仕方子孫に伝えられるとし、完全な均衡が達成されるまでは、後続の世代においても新しい環境への適応が続けられると考えた (Spencer1864a: 442, 474)。

このように生物の場合、(無生物の場合とは違って) 多様な試行錯誤が行われ、多様なあり方が生み出されることになり、やがては環境の変化をもたらすことになる。生命の創発は環境との間で相関的な生成変化をもたらすというのが第四の帰結である。環境から生命への作用は、生命の創発をもたらす、この創発は環境との間で新しい道を切り開くことになる。生物による創発は環境の新しい側面が開発されることでもあるのである。だとすれば、(生物の) 進化は環境そのものの変貌をもたらすことになる。例えば、スペンサーは分布 (distribution) [生態系] という仕方で生態学的関係について考察している。自然環境が生物の生存に影響するのはもちろんであるが(直接的均衡化)、他の生物の存在もまた生物の生存に影響する(「間接的均衡化 (indirect equilibration)」) (Spencer1864a: 418, 443ff.)。このことは「適者生存」という悪評高い考え方を再解釈する可能性をもたらす。というのも、環境は常に偶然的であり、かつ、諸種の相互関係の中で決まるようなものであるため、「適者」といってもその環境での適者でしかないからである。しかも、一方の生物が優位であるということは、他方の生物に対する圧力であるとともに、進化のきっかけともなる (Spencer1867b: 400)。さらに、ある環境への適応は同時に様々なジレンマの中で行われる。例えば、それは別な環境に対する不適応を意味するであろうし、適応のためのコストは別の能力とトレードオフ関係にある⁷。すると、「適者」というのは一時的なものでしかないことになる。ダーウィンの自然選択という概念はその内実が未規定なまま用いられているが、スペンサーの環境概念はその内実を説明する一つのやり方を示しているといえる。生物の進化によって環境の新しい側面が解明され、そのことによって、環境の潜在的可能性が多様化することになる。

第三節 進化の継承の原理

スペンサーは生物の進化を、生物が環境との相互関係の中で変化していくプロセスとして捉えている。これに対して、現代の生物学は、基本的に種を基本的に変化しないものとして捉え、時に生じる変異 (variation) が蓄積されることで進化が生じると考えている。一方において、生物の変化は次の世代へと継承されねば、消滅してしまうため、進化は遺伝と密接に関係している。しかし、他方において、親の形質を伝える遺伝のみでは進化を説明することはできない。進化が成立するためには、親の形質を伝えることができるように、それとは違った何らかの仕組みが形成され、それが継承されることが必要になる。

スペンサーやダーウィンの時代には遺伝のメカニズムは未だ解明されておらず、それが成し遂げられたのは20世紀になってからである。現代の生物学は遺伝を基本的に種としての形質を伝えるものであるとしている。これに対して、スペンサーは遺伝を個体の形質だけではなく、個体の変化をも伝えることと考えた。このようなスペンサーの考え方は獲得形質の遺伝を認めるラマルク主義としてもはや顧みられなくなっている。ダーウィンの進化論が遺伝学の成立以降も生き残っているのとは対照的である。スペンサーにおける進化と遺伝の関係について検討しておく必要がある。

スペンサーが考察しようとしたのは、環境との関係の中で新しい秩序がどのようにして発生するのかであり、そこに彼の進化論の特徴を見ることができる。その意味で、生物における狭義の「進化論」は彼の総合哲学の主題の一つではあるが、その全てではない。

「進化論」においてはどのように新しい形質が獲得されるのかは当初から中心的な課題であった。ラマルクは用不要説により新しい形質が獲得され、それが継承されるとした。これに対して、ダーウィンは変異については必ずしも明確な立場は取っていないものの、進化の主要因を自然選択に見て取っており、結果的に自然変異を想定することになっている。そして、遺伝子発見後の進化論は獲得形質の遺伝は不可能であるとし、遺伝子の特別変異に進化の可能性を求めている。このような理由から、ラマルクはダーウィンによって乗り越えられたと考えられてきた。これに対して、スペンサーは基本的にラマルクの用不要説をとっており、後に『種の起源』を通して、自然選択の考え方も受け入れてはいるが⁸、「社会進化論」を唱えたこともあり、非科学的な立場であるともっばら見なされている。

それでは、スペンサーにおいて、親とは違った形質の発現はどのように考えられるか。さしあたり、スペンサーは遺伝を親の構造が子に伝えられることであると、生まれながらの性質の遺伝と個体が獲得した性質の

遺伝とがあるとしている。これにともなって、スペンサーはラマルクの用不用説と変異の両方を検討している。スペンサーは遺伝と変異とは両立すると考えていた (Spencer1864a: § 85)。

一方において、獲得形質の遺伝については、スペンサー自身もその事例を挙げるのは困難であるとしているが (Spencer1864a: § 82)、ある人の発見が次の世代に伝えられるという事例を通して、獲得形質の遺伝を説明しようと試みている (Spencer1864a: 242)。ただし、ダーウィンにおいてそうであったように、スペンサーにおいても遺伝のメカニズムについての知識は限定的であり、この説明は必ずしも説得的ではない。確かに、遺伝子による遺伝は生物の遺伝の中心的なものであると考えれば、獲得形質の遺伝は不可能だということになる。しかし、遺伝を世代の間で何らかの形質が伝えられることという風に広義に理解するならば、遺伝を媒介するのは遺伝子だけではないと考えることもできる。スペンサーは病気の遺伝について言及しているが、この事例などは遺伝子によらない「遺伝」のあり方の事例となっている。実際、生活環境の共有によって、子孫に伝えられるような性質もまたありうる (Spencer1864a: § 82)。例えば、パンダやコアラの特異な食生活はそれを消化しうる能力に基づいているが、その能力は親が子の世話をする際に感染する細菌を介して、出生後に伝えられる。人間の言語能力は遺伝子によって遺伝されるが、その能力の発揮である言語は出生後の環境によって伝えられる。

また、特定の遺伝子の発現の仕方が環境によって変化することが知られている。用不要説の事例で言えば、キリンには首を伸ばす資質がもともと備わっており、そのような環境の中で世代を重ねる中でその資質がより強化されたのだと考えることができる。すると、親が選択した環境が子の性質の発現に影響すると解釈することもできる。これらのことは、環境との相互関係から進化を考えるという、スペンサーによる進化論の着想を現代的な観点から読み直す可能性を示唆している。

他方において、スペンサーもまた新しい形質の発現の原因として変異もまた認めている。スペンサーは、生物にはもともと分化する傾向性が備わっていると述べている (Spencer1864a: 423)。スペンサーは生殖は統合された親の状態から未統合な子の状態が発生することと理解している。そして、未統合な状態から発生をするということは、分化や統合を必ずしも同じとはいえない環境下で反復することであるから、別様な統合が成立する可能性をもたらすものである (Spencer1864a: 216, 234, 265)。まず、有性生殖は交配により新しい子孫をもたらすため、進化に有利であることを指摘している (Spencer1864a: § 96)。そしてさらに、同じ親から生まれても、ある個体のみが「自発的変異 (spontaneous variation)」をすること

があることを指摘している (Spencer1864a: 264)。もちろん、この考え方は遺伝子を想定してはいない。そのため、別な環境下で生殖や発生を行うことで、変異が生じるということが、同じ遺伝子であっても環境によって別の発現の仕方をするということを意味すると解釈することも、遺伝子そのものの変化をもたらすということの意味すると解釈することも可能になっている。現代的な遺伝の考え方からすれば、その発現形態が子どもには伝えられるのは後者の場合のみだということになる。だが、スペンサーの進化論はこのような解釈をする余地を排除するものではない (cf. Spencer1864a: 272)。

スペンサーは生物の進化を、生物と環境の間の経時的な変化として考え、その一部として遺伝を考えた。そこにおいて、遺伝とは同じものを伝えるのではなく、環境との間に動的平衡状態を作ることとして考えている。

第四節 『生物学原理』の成果

生物は環境に適応しようとして様々な試行錯誤を行う。その中で、多様なパラメータに適応するような解が「発見」される。だが、そのようにして発見された解といえども反復されねば、やがて失われてしまう。発見された解を持続・伝承させる仕組みが必要となる。この仕組みそのものもまた環境とのやり取りの中で「発見」されねばならない。進化は、一方において、偶然の組み合わせでしかないが、他方において、それが再現されるような仕組みの中に置かれるとき、反復的なものになることができる。組み合わせの発見はそれを再現する環境とペアになる必要があるのである。つまり、適応とは生物と環境とが相互に呼応しあうものとなることである。このような呼応関係はやがてパターン化し、起こりやすくなっていく。それが記号の成立であり、生命による認識の進化と解釈することができる。このような仕方では生物学は心理学へと接続することになる。

スペンサーは生物学を、生物による環境への適応とそれによる環境の相関的生成変化というあり方を説明する科学として理解する (Spencer1864a: 95)。すなわち、生物学が対象とする生命とは有機体の構造ではなく、環境に適応していくという機能である。従って、生物学は単に有機体の構造を分析する (機械論に基づく) 科学ではなく、生命と環境との動的な関係の中で生命の変化を考察する科学だということになる。ここには、生物を環境から切り離して考えるのではなく、環境との時間経過を伴う相互作用の中で考察しようとする観点が現れており、これはルイスの創発の発想とも共通している⁹。一つの創発は時間的にも空間的にも全体との関わりの中で生じるものとしてとらえられることになる。

『生物学原理』は、進化とは、生物が環境との相互作用の中で互いに絡み合う関係を形成することであること

を明らかにすることによって、『総合哲学の体系』における科学の総合によって全体としての実在に接近しているという論拠を与える役割を果たしている。

第三章 心の生成によるシミュレーション

生物の進化において、生物と環境とは相互に呼応し合う関係を作り出していく。諸生物はそれぞれの仕方で世界と呼応しあう。やがて、この呼応関係そのものが出来事として認知の対象になる。それが心の誕生である。この心の誕生が環境に何をもたらすことになるのかを検討することが、第三章の課題である。まず、『心理学原理』における心的なものの進化について概観し（第一節）、その上で、そのような進化が『総合哲学の体系』に何をもたらすことになるのかを考察する（第二節）。

第一節 進化心理学

『心理学原理』は『総合哲学の体系』の第四巻と第五巻をなしており、有機的なものからの心理的なものの生成を取り扱っている。もともと、『心理学原理』の第一版（1855）は連合心理学の考え方に依拠して、感覚や認識がどのようにして構成されるのかといった認識論的な問題を論じていた。だが、ペイン『感情と意志』（1855）の出版とそれに対する書評（Spencer1860a）などを經由して、第二版（1872）は大幅に増補がなされている。第二版は、環境の中でどのようにして感覚が発生してきたのか、また、個体における心理的なものがどのような進化をとげていくのか、さらに、心そのものが社会の中でどのような役割を果たすようになっていくのかといった心の進化について論じるようになっていく。すなわち、第二版は、第一版と同様に連合心理学に基づきながらも、経験論的な認識論をこえて、環境との相互関係の中での感覚や認識の成立を進化論的に展開しようとしている点にその特色がある（Spencer1872: 13）。

『生物学原理』においてスペンサーは神経系の発生について考察していた。単細胞生物においてすら部分への刺激を全体に伝達する仕組みが見られることを指摘し、あらゆる生物が化学的・電気的な変化を利用した伝達器官を分化させていったとしている（Spencer1867b: 346f. cf. Spencer1870: 508）。このような器官が発達することによって、生物の全体としての統合は高まり、環境との関係において生存に有利な関係性が作られる（Spencer1870: 539）。生物は、環境のある側面を看取する仕組みを形成し、環境と呼応し合う関係を作り上げていくというのである。

そして、『心理学原理』は環境とのカップリングの進化と並行して、心の進化もまた生じるとしている（Spencer1870: 191）。スペンサーは心の構成要素を感じ（feeling）であるとしているが（Spencer1872: 163）、それ

はさしあたり神経系が作用しており、その作用が看取されていることと解釈することができる。感じは、（中心部でおこる）情動（emotion）と（周辺部でおこる）感覚（sensation）とに区別することができる。感じは共存するとともに継起し、様々な心的現象を引き起こす（Spencer1872: 250）。特に、視覚の感じにおいて、時間と空間の間で一貫した関係性が反復的に再認されることによって、対象やそれらの関係、さらには、時間・空間といった観念が生み出されることになる（Spencer1870: 175ff., 188）。認知（cognition）は諸対象や観念の間の関係の看取として成立する（Spencer1870: 184, 475f.）。

感覚が互いに結びついていくのと同様に、情動もまた互いに結びついていき、関係を形成する。さらに、感覚と情動との関係をとおして、心と環境とのやりとり（行動）も関係づけられていく。例えば、スペンサーは抵抗の感覚は意志の意識と相関すると指摘している（Spencer1872: 242）。

このように、スペンサーは、一方において、感覚といった要素の連合からより高次な心的現象が生じるという連合心理学の発想を受け継ぎながらも、他方において、そのような発生を有機体と環境との生理学的な相互関係における進化として解釈しなおしている（Spencer1870: 189）。生体と環境との関係にうまくかみあうように心的なものは構成されるというのである（cf. Spencer1865: 213）。

第二節 進化論的認識論

神経系が発達する中で、外界の刺激に直接対応するような神経系のみならず、それらを複合するような神経系なども発達してくる。そこでの刺激はもはや外界の刺激に一对一対応するというよりも、むしろ、環境内の意味あるまとまりと対応するようになる（Spencer1870: 562）。やがて、生物の生存に有利な環境との関係性そのものが対象化され、それとして感じられるようになる（Spencer1870: 562, 565）。この感じは生物にとって重要なことを意味する「記号」として働くことになる。その中には、環境の諸対象や自己（Ego）はもちろん、相互の関わり方なども含まれる。このように生物と環境との関わりが生物によって感じられるようになるとき、意識が発生することになる（Spencer1870: 98）。

さらに、意識の発生によって、単なる生理学的反応から心的反応への移行が生じる（Spencer1870: 294）。ただし、スペンサーは意志を試行錯誤の中で形成された習慣によるものとみなしている。すなわち、意識は心的なものの諸契機の中の闘争として生じ、その中でより一貫した筋道が生き残り、それがそのまま意識されることになる（Spencer1872: 450）。意志を規定しているのは、生物と環境との相互作用の中で形成された関係性にすぎない

というのである¹⁰。

生物と環境との関わりは、空間的な拡がりにとどまらず、時間的な拡がりをももつ。直面する環境を認知するだけでなく、やがて、過去の状況の記憶を保持したり、将来の状況を予測したりできるようになる。

スペンサーは認知について、1) 現前的認知、2) 現前的・表象的認知(感覚の間の関係についての認知)、3) 表象的認知(関係の関係についての認知、回想)、4) 再現的認知(一般化された関係についての認知)という分類をしている(Spencer1872: § 480)。また、感じについても、現前的感情、現存的表象的感情、恐怖のような回避的感情、再現的感情という分類をしている。これらの複雑化によって、単なる表象から、その吟味や、さらには再現にとどまらない想像といった思考が可能となる(Spencer1872: 534)。このように、スペンサーは意識を継起と関連づけ、生理学的反応によって統合されたものをさらに、時間的経緯という観点から総合している(Spencer1870: 395, 402, 406)。特に、意識の発生によって、生物は、記憶や予測によって自己を統合するようになるとともに、自己と環境との関係をシミュレーションすることが可能になり、試行錯誤のプロセスを大幅に簡略化することができるようになる(Spencer1870: 353)。生物は、局所に留まりながらも、各々の場所からであるとはいえ、全体に関わるような仕方で試行錯誤を行うことができるようになる。

知性、感情、意志はこのような方策にともなうものとして再解釈される。例えば、複雑な状況になると自動化が難しくなり、諸選択の間での熟慮の仕組みが必要になり、知性が高度化する(Spencer1870: 581)。また、行動と感情の結びつきも、利害と結びついた単なる快・不快から、より高次の道徳的行動に結びつく高次の快が形成される(Spencer1870: 583)。認知し、記憶し、予測する生物の出現によって、環境はより複雑なものとなることになるが、その中から、社会的なものが芽生え、さらには、他者を配慮するという利他性もまた出現することになる。これらの主題について取り扱うのが『社会学原理』と『倫理学原理』である。

『総合哲学の体系』の基盤におかれる進化とは、一方において、認識の拡張という意味での認識の進化であると同時に、認識されるべき世界が認識されるべき構造を備えるに至る過程(=世界の進化)でもある。ある形態をとっている存在者もその形態を取るに至った環境や歴史との関連の内にあるのであり、その関連性を認識しなければ、その存在者を認識したことにならない。すなわち、認識の進化と世界の進化とが相即しあう関係にあり、そのようにしてのみ、実在への接近は成就する。「これまで進化の法則は存在の各々の秩序に関して真なるものとして考察され、別々の秩序としてみなされてきた。し

かし、このようにして示されたことから帰納されることは、われわれが存在の諸秩序を一つの自然な全体を形成するものとして考察することによってえられるであろう完全性には及ばない」(Spencer1867a: 545)。実在は、存在者と認識者を包括する環境と歴史の総体として考察せねばならないのである。

第四章 進化を継続するシステムとしての社会の成立

スペンサーは『社会学原理』において社会の進化を論じている。そのことから、彼の思想はもっぱら社会進化論として解釈されてきた。しかし、彼が展開したのは進化の一般理論であり、それを社会に適用することである(第一節)。心の誕生によって環境への関わりをシミュレーションすることが可能になったが、社会とは、このような可能性を、分業によって促進するとともに、文化の継承によって、維持・発展できるようにする仕組みである(第二節)。第四章の課題は、社会は進化を促進することで「知りえるもの」の拡張と体系化を促す役割を果たしているということを明らかにすることである。

第一節 スペンサー社会学の解釈の論点

スペンサーはかつて広く受容されながらも、その後、批判を受け、今では忘れられた状態にある。彼は基本的に社会学の創始者の一人と見なされ、その観点から受容されるとともに、批判されてきた。例えば、彼の功績は社会を独自の研究対象として自立させたことにあるとされた。それにともなって、次の世代の社会学者は社会学という観点からスペンサーの分析を批判することになり、やがて、時代遅れの社会学者と見なされるようになった。

また、スペンサーは社会批評家として解釈され、その立場からも批判された。例えば、スペンサーは個人相互の競争こそが個人を高め、社会も進化させることができると主張している。例えば、『社会静学』の冒頭では、(サンクションによって最大多数の最大幸福を実現しようとする)功利主義を批判し、自発性に訴えかける道徳感覚論(ハミルトンの観念論)を擁護している。また、『個人対国家』においても、スペンサーはホイッグ党が「新保守主義」になっていることを批判している。ホイッグ党は個人の自由を確保するのに功績があったが、貧窮法などが制度化されると、その制度に依存する個人が出てきて、社会の自発的な活動を阻害するようになるのみならず、この制度に賛同しない人にまでこの制度に寄付することを強制する「奴隷制度」になっているとする。国家が個人の自由を侵害し、結果として、社会の進化を阻むことになってしまっているというのである。これらの主

張により、スペンサーに個人主義者、自由至上主義者としてのイメージが定着することになる。

だが、スペンサーの社会論を政治的志向から判断することは適切とはいえない。例えば、ミルもまた自由主義を尊重したが、それは多様性の中で社会の中での共存の可能性を実験するためであり、単純な個人主義と見なすことはできない。スペンサーの個人主義的傾向もまた同様に解釈することができる。そして、スペンサーが、国家による規制を批判するのは、個人の自由による多様性を評価することで、社会の進化を促進するためであって、個人の自由を不可侵の価値と考えるからではない。

そもそも、スペンサーが社会学を展開するのは『総合哲学の体系』の一環としてである。そして、『社会学原理』の目的は、個人ですら社会という環境との関係において変化(=進化)するのであり、社会についても進化という第一原理が当てはまることを明らかにすることであった。

第二節 システムのシステムとしての社会とその役割

スペンサーは、「社会とは何か」という問いに対して、「社会は実体である」と答え、その実体を有機体とのアナロジーから解釈しようとした。スペンサーは両者に共通点を要素の独自の配列(arrangement)に見ている(Spencer1875: 448)。要素が独自の仕方配列されることで、独自の性質が創発するというのである。そして、配列が維持されていれば、要素は交替していても、社会は維持される(Spencer1875: 456)。

スペンサーは生物と社会とに共通する性質として、増大による構造の分化を挙げている。(1)まず、社会が形成されることによって、人口の成長が生じる(Spencer1875: 449)。(2)そして、この成長はさらに社会構造の分化をもたらす。(3)だが、単に分化していきただけではなく、その分化は、分化したものが互いに調和・協力できるような仕方で行われる(Spencer1875: 462)。(4)このような社会の変容はさらなる分化をもたらす。

スペンサーによれば、社会は1)外層、2)内層、3)分配システムへと分化し、それぞれ、1)規制、2)維持、3)分配という機能を果たす。未開社会においては社会の防衛が重要であり、全員が兵士であったが、防御を固めるためには、分業が必要になる(Spencer1875: 452)。社会の外界から内部を保護するために、戦士や狩人といった外層が分化するとともに、それに合わせて、外層がその役割に専念できるようにする内部が分化する。内部は家政や栽培に従事することになる。やがて、外層と内層とを媒介するための分配システムが発達する。具体的には交通や商業の仕組みがそれに相当する。だが、産業や商業が発達して、内層やそれを支える分配システムが発展すると、外層の重要性が相対的に低下す

ることになる。このようにして、「軍事型社会」から「産業型社会」への進化が生じる。それは、より効率的な統治への移行と分業の進行をもたらす(Spencer1875: § 258-§ 263)。そして、環境により効率的な仕方適応した社会が生き残ることになる(適者生存)。

また、社会の構成要素は人間だけではなく、社会生活が依拠する他の生物や環境もまた社会に組み込まれている(Spencer1875: 458)。これらのことを組み合わせて考えれば、諸システムもまた相互に関連しあいながら、システムのシステムを構成しており、その相互関係において、諸システムが成就していることになる。諸システムがそれぞれの仕方配列し、それぞれがそれぞれに対する環境となることで、諸システムの間相互照応の関係が生まれる。このような多様な観点からの進化(創発)は全体として複雑なシステムを形成することになる。社会内存在としての人間は複雑な関係性の中で進化しようとするような解を発見しなくてはならない。

以上において見てきたように、スペンサーはシステム論的な発想をしており、その意味で、デュルケーム、パーソンズへといたる社会学者の系譜の元の一つと見なすことができる。サン・シモンは政治構造が産業構造の変化に合致していないと指摘したが、デュルケームはそこから自己の社会学の出発点を見だし、『社会分業論』への道を開いた。そこで取り扱われたのは、機能主義の観点から社会内における分業がどのように成立していくのかであり、スペンサーの方向性とも合致している。

ただし、スペンサーは生物と社会とのアナロジーに留保をつけている。まず、社会は有機体ではない。スペンサー自身が述べているように、有機体は「凝結的(concrete)」であるのに対して、個人は「離散的(discrete)」である(Spencer1875: 457)。すなわち、有機体の構成要素が有機体の一部であり、それなしには存在しえないのに対して、個人はまずは自立的な存在者であると考えられることである。しかし、個人が個人として成立するためには、社会の中に生まれ落ち、他の個人と関係を取り結ばねばならない(Spencer1875: 460)。このように考えるならば、個人ですら(社会的存在として)「離散的」とばかりもいえないことになる¹¹⁾。むしろ、一方において、自律した要素から構成されながらも、他方において、生物と同じようなシステムをなしているという点に社会の独自性を見て取ることができる(Spencer1875: 448, 457)。「離散的」な要素が集合することで、「実体」として機能するというは、要素に還元されない性質が社会(システム)において成就しているということなのである(Spencer1875: 447)。

一方において、各個人が同一の仕方配列で環境に適応してしまうことは望ましくない。その場合、個人のあり方が単一的になってしまうからである。だが、他方において、

多様化は社会の統合を脅かす。かくして、個人を一定の範囲内において凝集的にする必要がある。結局、社会は、個人の自発的な多様化を許容しながらも、社会としての枠組みの中にとどめておかねばならないことになる。社会や道徳の役割は、個人でありながら、社会的存在としての側面を自覚させることにあるのである。

スペンサーは統合と多様化の両立という課題について「未開人」と「文明人」との対比を通して考察している。それは社会とは何かを単純な形態から探究するという初期の社会学者たち（モーガン『古代社会』、タイラー『原始文化』、フレイザー『金枝篇』、デュルケム『宗教生活の原初形態』、レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』、モース『贈与論』）と重なる発想であるとともに、他方で、社会の進化とは何かを考察するためであった。そのため、スペンサーの分析は未開人に「できないこと」の記述であるかのように受け取られうる。だが、スペンサーの意図は未開人から文明人がいかに生成するかを解明することである。したがって、彼の記述は、両者のメカニズムは共通でなくてはならず、そこからどのように分化や再統合がなされるのかという観点から、理解されねばならない。その意味では、レヴィ＝ストロースにおける「野生の思考」に匹敵することを行おうとしているとも言える。例えば、スペンサーは「未開の観念」という章において、未開人の観念が直接的であり、具体的であること、そして、それをを用いてあらゆることを説明してしまうとしている。これに対して、文明人はより複雑な関係性を記述することができるようになるとする。例えば、原始的な生物は運動を生命と結びつけてしまうが、高次な生物は生命にはさらに意図が必要であるとする。より詳細な区別になっていると解釈できる。

「適者生存」という原理に従うならば、未開から文明への「進化」のプロセスについて解明するだけでなく、さらに、未開が未開として生成してきた原理についても解明する必要がある。確かに、スペンサーが中心的に論じているのは未開から文明への進化であるが、「社会学の与件」では後者も行っている。そのことは、「社会学の与件」のまとめとなる第24章において、未開の思考法が、文明人のような区別をなしてはいないにしても、ごく自然に「進化」してきたものであることを確認していることから、見て取ることができる（Spencer 1875: 432ff.）。例えば、スペンサーは昼と夜との交替が二元論の発生を生んだと説明している。スペンサー自身は行わなかったものの、このような発想に立てば、さらに未開と文明の違いを説明することが可能になる。レヴィ＝ストロースは未開と文明の根源的な同一性をもとに、「冷たい社会」と「熱い社会」との対比を行ったのであった。

ここには、ミル以来の創発性をめぐる議論がからんでいる。配列によって独自の性質が創発したとしても、そ

れを維持するような環境が無ければ、単なる偶然にとどまってしまう。未開社会が分化や進化を制限する仕組みを備えていたのに対して、文明社会はその制限を撤廃し、分化や進化を促進する。産業社会への移行は社会を構成する個人の多様性を促進することによって、社会全体の更新を促進することになる。このことによって、心の誕生によって可能となったシミュレーションが多様な仕方で遂行される仕組みが形成される。その一つのあり方が科学である。科学は有限なシステムから環境に対処しようとして、試行錯誤を繰り返して、成果を挙げるものは継承されることになる。かくして、認識をめぐる闘争の場は意識から社会へと移行することになる。

個人が集まるとき、社会が生まれるが、この社会は環境に適応するために進化をしていくことになる。すなわち、分化を遂げていくことになる。境界の維持、集団の存続、内部での流通である。このような分化は社会の性質の変化をもたらすとともに、人間の認知のあり方の変様をももたらすことになる。社会は、一方において、外部の環境との関係を安定したものにするための仕組みであるが、他方において、個々の人間のあり方を規定する環境としても機能する。産業社会は多様化する個人のあり方を促進することで、社会そのものの進化を確保しようとする。このようにして、進化を推進する文化が継承され、そのことに基づいて多様なシミュレーションが遂行されることになる。

第五章 進化を促進させる規範の生成

『倫理学原理』は規範を進化の観点から記述する。従来、スペンサーは社会進化論の立場から社会による個人の自由への介入を退けるとともに、自発的な利他性の発達を是とする自由主義者として解釈されてきた。もちろん、この理解はスペンサー自身の記述に基づくものではあるが、必ずしもスペンサーの哲学の全体像をふまえたものとはいえない。第五章においては、『倫理学原理』での主張を『総合哲学の体系』全体の文脈の中に位置づけることで（第一節）、進化の中で倫理が果たす役割について考察し、進化の過程の中で人間が進化を促進しようとする仕組みを内在化させてきたということを示す（第二節）。

第一節 『倫理学原理』の目的と概要

『総合哲学の体系』の締めくくりとなるのが『倫理学原理』である。この著作は進化の中で規範が生まれてくるということを示すことを目的としている。生命、心、社会が生成する中で規範もまた生まれてくる。言い換えれば、道徳には生物学的・社会学的基礎があるというのである。

分析の出発点として、スペンサーは倫理学の現状がどのようなものであるのかを「倫理学の与件」として記述している。さしあたり、倫理が目的とするのは、他者とも共栄しながら、自己の生命を保存するとともに、子孫を繁栄させることである (Spencer1892a: 25f.)。このような目的にかなう行為は促進されることが望ましい。ただし、「～すべきこと」だからといって、個人が実際になすとは限らない。そこで、この目的を実現するために、倫理のあり方を進化させてきた。すなわち、倫理的行為を価値あることとして評価したり、そのような価値あることを為すことに快が伴うようにしたりしてきた (Spencer1892a: 256)。

倫理学の領域としては、正義論 (自分に対する倫理) と、徳論 (他者に対する倫理) とがある。また、目的との関係が直接的な行為から、やがて、比較的遠い目的を実現するための間接的な行為もまた生まれてくることになる (Spencer1892a: § 11)。これと並行して、行為の方向性もまた物質的方面 (他の行為との関連性、目的の明瞭さ、分化、公平性)、生物的方面 (能力の発揮による快楽、道徳性という快)、心理的方面 (進化するにつれて動機や発動が複雑化し、より遠い目的の実現をめざすようになること)、社会的方面 (社会的生活の最適化、社会における協力関係) など様々でありうる (Spencer1892a: Part 1, Chap. 5~8)。ただし、利己と利他、個人と集団などの関係は相互にからみあっており、総合的なシステムを構築する必要がある。このように、倫理もまた単純で直接的な規範から、複雑で間接的な規範へと多様化してきたと考えられる。

社会が進化し、そのあり方が変様すると、倫理として求められるあり方も変様する。その都度の社会で生存するために便益をもたらすものが変化するからである。スペンサーは『社会学原理』において、人間社会は「原始社会」から「軍事社会」を経由して「産業社会」へと進化したとしていた。原始社会においては、各状況ごとの道徳が並存しており、未分化 (= 原理化されていない) である。これに対して、軍事社会となると、敵味方に分かれることが社会の原則となる。すると、他者に敵対的であり、自分たちに有利であることがよいこととされるようになる。さらに、産業社会になると、単に、悪を罰するだけではなく、利益をも評価するようになる (正義)。これに合わせて、利他性が評価されるとともに、長期的視野に立つ徳 (正直、勤勉、節制) もまた評価されるようになる。

だが、『倫理学原理』には以上のような進化論的倫理学としての側面と同時代の社会や倫理のあり方についての提言という側面が、『社会学原理』の場合と同様に、混在している。

まず、社会進化論の立場から、当時のホイッグ党によ

る福祉政策を批判し、自発的な利他性の発達を是とする主張を展開している。なるほど、分業ないし多様化による社会の進化という観点からすれば、上記の政策はこれに反しているように思われる。しかし、何を進化と見なすかはその都度の環境によって規定されるとすれば、進化論的観点から普遍的な仕方だけで規範的な提言を導出することはできない (それを行うのは適者生存である)。したがって、同時代の現象に対して前提条件を明確にしないまま提言を行うのは適切ではないということになる。福祉的政策は一方において個人の多様性を制約することになるかもしれないが、他方において、それは社会全体としての維持に貢献するかもしれない、新たな階級の分化を意味するのかもしれない。このように考えるならば、スペンサーの原理的考察と提言的考察を水準を異にするものとして考え、後者をある一時点におけるものと解釈して、むしろ、前者をより広範な主張として理解する必要がある。

また、スペンサーは進化論者でありながらも、快の促進を目的としているかのように解釈できる記述を残している。しかしながら、快は、単純に個体の感覚のこととしてではなく、個体の行動を導くような契機として解釈されるべきである。個体は環境の中で様々な要素との相互関係にさらされ、自らのあり方を選択するが、その際により望ましいものとして選択を促す契機こそが快なのである (ミルにおける質的快楽)。自然の進化の流れの中にあり、生の充進に寄与するとき、幸福であると感じるようになることが重要となる。

意識によるシミュレーションが行われるとともに、自己のあり方そのものの倫理的改造による社会の改善が行われる。例えば、共存を可能にする社会性やそれを涵養する情緒 (共感) などが進化するようになる (Spencer1872: § 503, § 504)。例えば、社会が複雑化すると相互の依存性も高まる。すると、情緒や感情も社会的福祉を高める方向へと進化する。個人の快と社会の福祉は両方が必要であり、利己的・利他的感情の発達をうながす (Spencer1872: 609ff.)。社会が進化すると心も進化して、道徳的行動を進んで行うことができるようになる (Spencer1872: § 202-§ 203)。一方において、進化のためには個体同士が生存競争をした方がよい。しかし、他方において、生存のために協力することによって、種全体が生き残ることができるような場合には、動物は社会性や社交性 (gregariousness) を進化させる (Spencer1872: 560)。このように人間は利己的情緒のみならず、利他的情緒を発達させる (Spencer1872: § 524-525)。この箇所でもスペンサーは「最適者生存」という語を用いている (Spencer1872: 547f., 575, 623)。創発を可能とする環境を保全することができるかどうか重要なのである¹²。

第二節 倫理学の進化における役割

以上のように解釈しなおしたとしても、倫理学に進化論を適用するという目論見は困難をはらんでいる。というのも、1) 倫理においてはあるべき理想から規範が設定される。倫理は何らかのシステムを維持しようとする点で本来保守的なものであり、さらなる進化を拒むものでもあるのであるのに対して、進化論は規範を環境への適応の結果として解釈するからである。しかも、2) 環境への適応は多義的である。例えば、種として適応するのか、個体として適応するのかによって適応のあり方は異なってくるであろう。

1) について言えば、スペンサーは進化を環境に適応するための複雑化として理解しているため、人類の存続に有利に機能するであろう利他性の発達を倫理として解釈している。スペンサーは、より複雑な環境への適応には分化と統合とが不可欠であると考え、そのためには個体が社会に寄与することが必要であると考える。

このような理解を前提とすれば、2) についての立場も定まることになる。スペンサーにおいて適応とは、個体としての適応ではなく、種としての適応を意味する。もちろん、蟻などのような群生は独自の進化ではあるが、人間の場合、社会化のみならず、個体化をも行うことで、群生よりも複雑な構造を形成している（多様性の確保が社会の存続に寄与する）と考える。そのような仕方での適応を最適化するためには、利他性や子孫の再生産が不可欠になるが、それだけではなく、それを行う個体にとっての利益をも考慮する必要がある（個体を無視しては社会が存続しえない）。すなわち、自己保存や個人としての快も無視することはできず、これらのバランスを調整する必要性が生じるのである。そして、これらのバランスが調整されることが進化ということになる¹³。

『社会学原理』は人間が環境に適応するために社会を形成し、それを進化させてきたプロセスを記述していた。これに対して、『倫理学原理』はそのようにして形成されてきた社会に個体としての人間が適応しなおしていくプロセスを記述している。したがって、『倫理学原理』は、『社会学原理』が社会の側から記述した事柄を、今度は個人の側から記述していく。このような相互振動は、物質界、生物界、人間界の間で継続していく。そして、人間はこのような相互振動を意識化するようになるとともに、意図的にこの相互振動に参加するようになる。

終章

本論文の目的は、スペンサーが、進化概念を原理とする体系化によって、全体として何を目指したのかを明らかにすることであった。

その考察によれば、生物とは環境に適応するあり方を

試行錯誤の中で発見する営みであり、やがては生物と環境との間に対応しあう関係性を形成することになる。やがて、生物は適応の過程の中で環境を認識したり、環境に働きかけたりする方法を形成するようになっていく。社会は個々の人間のあり方を規定する環境として機能するが、やがて、進化を推進する文化を形成することで、進化を推進するあり方へと進化していくことになる。倫理は社会を構成する個人の内面に働きかけることで、同じ役割を果たす。

以上において見てきたように、スペンサーの『総合哲学の体系』は、環境の中での要素の分化によって、知りうるものの領域が拡張され、それに伴って、その背後にある世界の構造が徐々に開明されていくプロセスを明らかにしようとするものであった。そして、このことによって、近代になって、自然科学が発達する一方で、真理の基礎づけが揺らぐ中で、真理を確証し、さらに形而上学的な意味を確保するという役割を果たそうとしたと解釈することができる。スペンサーは社会進化論や自由至上主義的政治を唱えた言論家として理解されてきたが、それらは彼の体系を一部しかとらえていない。むしろ、彼の哲学の中心はこのような形而上学的構想の体系性にあるとすることができるのである¹⁴。

スペンサーの著作

Spencer1851, *Social Statics*, 1851.

Spencer1852, “The Development Hypothesis”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.

Spencer1853, “Universal Postulate”, in *Westminster Review* 60, 1853.

Spencer1855, *Principles of Psychology*, 1855.

Spencer1857a, “Progress: its law and cause”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.

Spencer1857b, “Transcendental Physiology”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.

Spencer1860a, “Bain on the emotions and the will”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.

Spencer1860b, “Prospectus of Synthetic Philosophy”, 1860

Spencer1862, *First Principles*, 1862.

Spencer1864a, *The Principles of Biology, vol.1*, 1864.

Spencer1864b, “Reasons for Dissenting from the Philosophy of M. Comte”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891.

Spencer1865: “Mill versus Hamilton”, in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891

Spencer1867a, *First Principles*, 2nd. ed., 1867.

Spencer1867b, *The Principles of Biology, vol.2*, 1867.

Spencer1870, *Principles of Psychology, vol.1*, 2nd. ed., 1870

Spencer1872, *Principles of Psychology*, vol.2, 2nd. ed., 1872
 Spencer1875, *Principles of Sociology*, vol.1, 1875
 Spencer1885, *Principles of Sociology*, vol.2, 1885
 Spencer1896, *Principles of Sociology*, vol.3, 1896
 Spencer1892a, *Principles of Ethics*, vol.1, 1892.
 Spencer1892b, *Principles of Ethics*, vol.2, 1892.
 Spencer1904a, *Autobiography* vol.1,1904.
 Spencer1904b, *Autobiography* vol.2,1904.

- ¹ スпенサーの「発達の仮説」(Spencer1852)はダーウィンの『種の起源』(1859)よりも先に公刊され、evolution(進化)という概念を用いている。また、「適者生存」という概念もまたスペンサーが先にもち始め、やがて、ダーウィンも用いるようになった。
- ² J.H.アブラハム『社会学思想の系譜』(法政大学出版局)1988: 88,116.
- ³ 1896年にこの著作が完成したとき、「私は、私がそのために生きていた仕事を終わった」と言ったと伝えられている。阿閉吉男他『社会学史概論』(劉草書房)1957: 54。なお、『総合哲学の体系』とは、『第一原理』(Spencer1862, 1867a)に始まり、『生物学原理』(Spencer1864a, 1867b)、『心理学原理』(Spencer1870, 1872)、『社会学原理』(Spencer1875, 1885, 1896)を経由し、『倫理学原理』(Spencer1892a, 1892b)に至るスペンサーの著作の総称である。
- ⁴ Carpenter, William Benjamin, *Principles of General and Comparative Physiology*, 1839: 170.
- ⁵ 1857年の「超越論的生理学」に先立つ1853年にスペンサーは「普遍的要請」という論考を発表している。スペンサーはこの論考で「否定しえないことは真理とみなしてよい」という命題を「普遍的要請」として主張している (Spencer1853: 531)。
- ⁶ スペンサーはここでフォン・ベーアの「反復説」に言及している。生物が個体としての完成に至るためには、誰かの手によって目的論的に実行されることはできず、単純な細胞からの「発生」が必要となる。そのため、あらゆる生物は途中までは類似した経過をたどることになるというのである (Spencer1864a: § 52)。このような発想法は、DNAという設計図によって生体が形成されるという発想よりも、進化論的発生学の考え方に近い。
- ⁷ スペンサーは、生長や発達と生殖の間にはトレードオフ関係があることを指摘している (Spencer1867b: § 334-§ 361)。また、人間の場合、複雑化が進んでいるため、多産は不可能である。個人化のコストが高いため、繁殖率が低下するとしている (Spencer1867b: § 374)。

- ⁸ スペンサーの進化論はダーウィンの『種の起源』よりも早く始まるが、『生物学の原理』が書かれたのはその出版後である。
- ⁹ この点については、拙論「心理学における「創発」概念の系譜」兵庫教育大学研究紀要第57巻、2020を参照。
- ¹⁰ そのため、スペンサーは自分の立場を唯物論でも唯心論でもないとしている。まず、意志は生理学的な反応の機構から独立しており、単なる唯物論ではない。しかし、だからといって、選択を決定する意志という実体があり、それが因果関係の起点となっているとも考えていない (Spencer1870: 495-504)。その意味で唯心論でもないのである (Spencer1870: § 270)。
- ¹¹ 富永健一『思想としての社会学』 p.187参照。
- ¹² スペンサーはこのようにして発達してきたものが遺伝されると考える。確かに、獲得形質の遺伝は遺伝子を通しては不可能であるが、社会的心情は社会的環境を通して伝承される。例えば、狩猟生活をしていたときに身につけた獲物に対する感じ、推論、行動などが遺伝されるとしている (Spencer1872: § 200)。環境の中での振る舞いは神経系の変化を促し、それが定着することになる (Spencer1872: § 204)。
- ¹³ その意味では、強制的な規範の消失 [=則を超えず]こそが倫理の究極のあり方ということになるかもしれない。この点においてはヘーゲルの人倫との類似性を見て取ることもできる。
- ¹⁴ 本研究はJPS 科研費19K00005の助成を受けた。